

---

# 死神達の鎮魂歌～僕が人間を辞めた日～

下駄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死神達の鎮魂歌〜僕が人間を辞めた日〜

### 【Nコード】

N3885D

### 【作者名】

下駄

### 【あらすじ】

埋没するタイプの中に埋没するタイプ、佐々修司のもとに突如現れた死神カリス。彼女との出会いで彼の運命は一変する。作者渾身のファンタジー物です

## 第一話：始まりの夜（前書き）

コメディ狂いの作者が頑張って書きました

## 第一話：始まりの夜

これから話す物語は僕がまだヒトだった頃の事だ。ある死神との出会いが僕の人生を変え、僕の運命すら変えてしまった

・・・

「帰ろう」

僕の名前は佐々修司<sup>ササシユウジ</sup>

高校三年生だ。ここは僕の通っている学校、平岡高等学校。ごく平凡な公立高だ、みんなは平高と呼んでる

「あ、本屋に寄って行かないと」

僕には別に特技も無いし、他の人よりも優れたところがあるわけでも無い。言っなれば埋没するタイプ、の中に埋没するタイプだ。したがって、友達と呼べる友達も多分いない。だから今日も一人で帰宅する

「ゲーセン寄って帰ろうぜ！」

「お！ナイス案！」

ゲームセンターか、そう言えば一度も行ったこと無いな。でも、だからといって彼等が羨ましいと思った事は一度も無い。僕は基本的に人との馴れ合いが得意じゃない、シャイだからとか、一人が好きとかそんな格好良い理由じゃない。単に自信が無いんだ、人と接することに

・・・

「え〜と、お、これは…」

ここは平岡商店街、僕の住む平岡町にある小さな商店街だ。商店街  
と言えば賑やかなのを想像する人がいるかも知れないけど、そんな  
商店街はほんの一握りくらいしか無いと思う。平岡商店街はいつも  
閑散としていて、ほとんどの商店はシャッターが降りている。僕は  
この商店街の雰囲気が好きで商店街の中に一つだけある書店によく  
立ち寄る、つまりここだ

「……………」

こここの書店だけはいつ来ても絶対にシャッターが上がっている、そ  
して何より品揃えが面白い。ここには漫画や週刊誌が一切置いてな  
い代わりに、「世界のネジ」、「バネの不思議」などというマニア  
ックと呼んで良いのかすらわからないような本が山の様にある、僕  
はこういった本を見つけると思わず手が伸びてしまう。僕って変な  
んだらうか

僕は本が好きだ、ジャンルは問わないけど、特に英国文学が好きだ。  
向こうの人達が書く本は日本のソレとは違って夢があっていい、ま  
あ夢って年でもないか

・・・

「お客さん、もう閉めるよ」

「えっ！あつ、ごめんなさい！えつと…これください」

しまった、つい「世界のネジ」を読みふけてしまった。もう20時近い、最近は何騒だし早く帰ろう

「ありがとうございます」

僕は目的の本を買って書店を出た。今は10月、もう外は真っ暗だ。普段から閑散としているこの商店街も一層静かで少し不気味だ

「なんか、気味が悪いな」

人通りの無い暗い商店街を歩くのにはちょっと抵抗があった。それに、なんだか嫌な予感もした。僕には第六感なんて無いけど、妙な胸騒ぎがしたんだ

「…近道しよう」

これが間違이었다。もしくはこれは運命だったのかも知れないけど、とにかくこの選択が全ての始まりだったと思う

「ハッ、ハッ、ハッハッ…」

僕の家は商店街を抜けてしばらく行った所の住宅街にあるんだが、商店街の細い路地を縫って歩いて行くと僕の家の中裏に出ることが出来る。

ただ、夜に一人でここを歩くのにはだいぶ勇気がある、僕は早く家に帰りたい一心でこの暗い路地を走った。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ、…！」

もうすぐで路地を抜けられるという所で、少し厄介な事になった。

誰かがいる、僕と同じ様に路地を抜けようとしているのならさして問題は無いけど、その人はジツと動かずに立っている。

この路地の道幅では走ってすれ違うのは多分無理だ。僕は仕方無くスピードを緩めた。大丈夫、家はすぐ何だから何があっても逃げられる

…だけど、この認識が甘かった

「はあ、はあ、はあ…！」

その人との距離が徐々に縮まって行く、5メートル、3メートル、1メートル…

「……………」

「……………」

…良かった、何とか切り抜けることが出来た。後少しでこの狭い路地からぬけだせる。臆病な僕は安心からか、ため息を一つ吐いた

「…ふう」

「安心したか？」

「…ッ!？」

男の声だ、顔を見なかったから気付かなかったけど、どうやら男だったらしい。安心仕切っていた僕は一瞬体が硬直した

「なあお前…」

「ッ！」

男が再び喋り始めたと同時に、僕は全速力で駆け出した。路地さえ抜けてしまえば先は住宅街だ、声を出せば誰かが助けてくれる

「オイオイ、いきなり逃げるなよ。俺はデリケートなんだ、傷つくだろ」

「なっ!?!」

後数メートルで抜けられる。そう思った時、後ろにいたはずの男がどろどろという訳か僕の目の前に立ちはだかっている。例え彼が陸上の選手だったとしても、この路地で僕を追い抜くなんて不可能だ。

何度も言うけどこの路地は狭い、さっきはゆっくりすり抜けたから通れたけど、走っている人間の横を抜ける何て絶対に無理だ。

「どうした？何をそんなに驚いてる？」

でもこの男は僕の目の前にいる、一体どうなってるんだ

「ぼ、僕に、何か用ですか？」

「いや、別に誰でも良いんだけどな。お前がここを通ったからな」

近道なんかするんじゃない。僕は心から後悔したが、もう遅い。僕はこの得体の知れない男に捕まってしまった

「悪いけどさあ、お前…死んでくんねえかな」

「…は？」

「は？じゃねえよ、死んでくれて言ってるんだよ」

僕は理解出来なかったが、今確かにこの男は僕に死んでくれと言った。どういうことだ？

「な、何言ってる…」

「ああっ！めんどくせえ！お前、そこ動くなよ？」

男はそう言ってる、僕に近づいてくる。僕はまだ状況が把握出来て無かったけど、とにかく逃げ出した。このままじゃ危ない！直感がそう告げた

「クッ！」

「だあかあらあーっ！」

「ハッ、ハッ、うぐっっ！」

男と反対方向に走り出してすぐ、僕は捕まって壁に叩きつけられた。

まただ、いくら何でも速すぎる。僕と男との間は数メートルはあつ

たはずだ。いくら超人的な筋力があつたとしても、速すぎる。

「逃げんなつたつたろうが！」

「ぐっ！」

僕は首を壁に押し付けられ完璧に固定された。左手一本にも関わらず、外そうとしてもビクともしない。利き腕という事も考えられるけど、それにしたって尋常じゃない

「まあそう暴れんなよ、痛いのは一瞬、次の瞬間にはもう何も感じねえよ」

男はそう言つと腰に刺してあつたのか、手斧を取り出し振り上げた。ダメだ、殺される…

「あ、あああ…」

「そうだ…死んじまうお前に教えといてやるよ。お前が殺される理由をよ、知りてえだろ？」

…確かに知りたい、僕は何故この得体の知れない男に突然殺されなければいけないんだ。だけど今僕はそれどころじゃない

「さつきも言つたが、別にお前じゃなくても良いんだ。俺は誰でも良いから殺さなくちゃなんねえ」

「い、嫌だ…やめて…」

脅える僕にかまわず、男は続けた

「何で殺さなくちゃいけねえのか…そりゃ俺が死神だからだよ」

死神、この言葉を聞いた途端に僕の意識というか、思考能力が帰ってきた。今考えたら少し不思議だ

「し、死神？何言ってる…ぐうっ！」

「これ以上教えてやることはねえよ、後は死んでからゆっくり考えな」

男は言い終えると、遂に持っていた手斧を振り下ろした。

「うっ！わあああああ…っ！」

僕は振り下ろされる斧を直視できず目を閉じた。こんなところで僕の人生の幕が下りてしまうのか…

「……………？」

…おかしい、何も感じない。一瞬の事で痛みすら感じることなく死んでしまったんだろうか。それとも僕はまだ死んで無いのか…僕はとにかくゆっくりと目を開いた

「…うっっ！」

どうやら僕は助かったらしい、この男が何を思って止めたのかは知らないが、斧は僕の眼前、目の前でピタリと止まっている

「そこまでだ、テセニーゼ」

女の声だ、この段階で僕はようやくあることに気がついた。商店街側から、漫画でしか見たことのない大鎌のような刃物がスルリと伸びている。鎌は下からすくい上げるようにして男の首にあてがわれていた

「どうやらこの男は思いとどまったのでは無く、止めざるを得なかったらしい」

「おいおいカリス、仕事の邪魔をするなよ」

「テセニーゼと呼ばれたこの男は僕から目を離す事無く、鎌の持ち主にそう言う。もう一度斧を振り下ろそうとした」

「ひっ！」

「やめろ、その人間を離せ」

鎌が少しだけ動くと、男は斧をしまい僕の首から手を離れた。

「僕は助かったのか？いや、もう何でも良い。今はとにかく逃げな  
いと！」

「ッ！」

「あつ、オイ！」

「ハッ！ハッ！ハッ！」

この時の僕には、また追いつかれるのでは、とかそういう考えはまるで無かった。とにかく逃げる事だけが頭の中を埋め尽くしていた。

・・・

あの少年が逃げ去ったのを確認して、私はテセニーゼを解放した

「…あゝあ、逃がしちまった。カリス、何で邪魔しやがった」

「…クズめ、今すぐ私の前から失せろ」

「お前が勝手に来たんだろうが、それを…」

あの少年を逃がしたのがよほど気に入らなかったのか、テセニーゼはしつこく噛みついてくる

「黙れ、それ以上喋ってみろ。殺してやるぞ？それが嫌なら今すぐ消えろ、目障りだ」

「…わかったよ」

テセニーゼは不満そうにそう言うと、ようやく私の前から姿を消した。

「……………」

奴が消えたのを確認して、私も道を引き返そうと振り返ったその時…

「カリス、あんまり俺をなめるなよ？」

「ーッ！うぐっ！」

再びテセニーゼが現れ、私の脇腹深くに斧を入れた。しまった…完全に油断をしていた

「なあカリス、気分はどうだ？俺みたいな奴に殺される気分はよ？」

「…ぐっ、クズ、が」

あまりに傷が深いために、反撃が出来ない。そして私の苦悶の表情を見て、ますます傷を押し広げていく

「くあっ！あああ…」

「俺は優しいからな、とどめは刺さないでおいてやるよ。まあ、このままじゃどの道死ぬだろうけどっなあっ！」

「あぐうっ！」

テセニーゼは深々と入れていた斧を一気に引き抜いた。途端に出血は勢いを増し、私は力無く膝を折り遂には倒れた。体から血が抜けていく不快な感覚と痛みが体を支配する

「じゃあなカリス、俺は忙しいんだ。シゴトをしないといけないからな。お前が生きてたらまた会おうぜ…いや、もう無理か。ハアーッハッハッハッハッハッ…」

「ま、待て、テセニー…くうっ！」

テセニーゼは耳障りな高笑いを残して姿を消した。…傷が深すぎる、

どこかで手当てをしなければ

「…仕方ない、ぐっ！ううッ！」

私は何とか体を起こし、残された僅かな力で弱々しく歩く。ある者の気配を追って…

…

「ハア、ハア、ハア…なんだって僕がこんな目に、わけが分からないよ」

僕は何とか無事に帰宅する事が出来た。だけど頭の中はグチャグチャになってる。全部あの男のせいだ、テセニーゼって呼ばれてたっけ

「修司、随分遅かったのね。最近は物騒なんだから早く帰って来ないとか心配するじゃない」

「ああ、ごめん母さん。ちょっと本屋に寄ってたから」

僕が玄関に座り込んでいるとそれに気づいて母さんがやってきた。僕の家は片親だ、父さんは僕が幼稚園児の頃に事故で亡くなったらしい。それ以来母さんは女手一つで僕をここまで育ててくれた。だからだろうか、今時の高校生の親にしては随分過保護だと思う

「もう、遅くなる時には連絡しなさいっていつも言ってるでしょう？」

「ごめん、全然忘れてた」

僕くらいの年の学生なんかは親を煩わしく感じるらしいけど、そういう感覚は僕には理解出来ない。

僕は母さんとよく買い物に行ったり、遊びに出掛けたりする。僕みたいのはマザコンって言うらしいけど、何が悪いのかわからない。僕にとって母さんは凄く大切なかけがえの無い人なんだ

「ちょっと修司、あんた顔色悪いわよ？何かあったの？」

「え、そう？何もなかったけど、ちょっと気分が悪いかな。今日はもう風呂入って寝るよ」

さっきまで殺されかけてたんだから、顔色も悪くなるか。でも母さんにはとても言えない、殺されかけたなんて言ったらきつと卒倒する

「そう？じゃあ風邪ひかないようにちゃんと暖かくして寝るのよ？」

「わかってる、お休み」

・・・

「……」

風呂を上がって、自分の部屋で僕はずっと頭を抱えていた。もちろん今日の出来事の事だ

「あいつ、死神って言ってた……」

死神…漫画なんかではよく見るけど、実際にいるなんてとても思えない。あれは頭のおかしいただの通り魔だと思おう。

「通り魔…外国人の？」

あの男、テセニーゼだっけ。日本人の名前とは思えない、だとしたら外国人…でもそんな感じはなかったけど。

というか本当に人間か？人間だとしたら、あの路地で僕を追い越した説明がつかない。…だとするとやっぱり死神？

「…あゝっ！もうわけわかんないよ！大体何で僕が殺されなきゃなんないんだ！あの時鎌の人が助けて…くれた…から…」

…あれ？もし、あの時の鎌の人がいなかったら、僕は…殺されていた？

「………うわっ！あ、あれ？た、立てない」

頭が混乱していたのと、興奮していたのとで全然実感が無かったけれど、鎌の人がいなかったら僕は確実に殺されていた。その事に今更実感が湧いて来て、僕は腰を抜かした

「…ダメだ、今日はもう寝よう」

もうこれ以上は頭が回らないのと、寝て全てを忘れたいので、僕は急に眠くなりもう寝ることにした

「はあ、起きた時に記憶が全部消えてれば良いのに」

僕はそう言って、部屋の灯りを消しベッドに潜り込んだ。…その時だった。

ドサッ！

「ん？」

僕が目を閉じた途端、何か重量のある物が落ちるような音がした

「何か重い物あったっけこの部屋…ッ！」

灯りをつけるためベッドから降りると、どついつ訳か足元に水たまりが出来ている、しかもなんか生暖かい

「う、ぐううう」

「うわっ」

唸った！人？人の唸り声だ！どうやって僕の部屋に？というか何で僕の部屋に？

恐る恐る灯りをつけると、そこには普通の生活をしていればまず目にするこの無いものが横たわっていた

「…ッ！うわわわわっ！」

「すまないが、しばらく私をかくまってくれないか？」

これが彼女が僕に向かって言った初めての言葉だった

「え？何？一体何なんですか？ていうか誰なんですか？どうやってここに？」

「すまない、私には君の質問に答えているような余裕は無いんだ。私を置いてくれるのかくれないのか、そこだけハッキリして欲しい。駄目だと言うならすぐにでも出ていこう」

どうなってるんだ？一体何だっけって言うんだこの状況は？ああもう！わけわかんないよ！

「か、かくまうかどうかは今は置いて、とりあえず出血を止めないと！そこでじっとしてて下さい！」

「あ、おい……」

僕は謎の女性を一人残し、部屋を飛び出した。この時僕はどういう訳か何とかして助けなくては！と思っていた。普通なら真っ先に110番、よくて119番に電話だ

「ガーゼガーゼ……いや、ガーゼじゃ間に合わない。……ッ！確か新聞屋がやたら沢山よこした新品のタオルがあっただけ、後は包帯と……」

「修司？そんなに沢山のタオル持ってどうするの？」

「ああ母さん、ちょっと止血を……」

マズい……僕は何を言おうとしてるんだ？

「修司？」

母さんがアレを見たらエライことになる！何とか誤魔化さないと

「その…止血には大量のタオルがいるんだって、だからいつ何があっても良いように準備してるんだ」

「それはそうでしょうけど、なんで今なの？」

クツ、鋭いな母さん

「何言ってるんの母さん！いつなにがあるかわからないじゃないか！僕達はすぐに動き出せるように準備しておくべきなんだよ！」

「そ、そう、じゃあ頑張ってるね？」

「まかせてよ！」

ああ、これで母さんの悩み事が一つ増えた。…とりあえず今は急がなくちゃ、文句は後で直接言おう

「大丈夫ですか！タオル持って来ましたから止血…を…」

急いで部屋に戻ると、さっきまで血だらけで倒れていた人が何故か上半身裸で突っ立っていた

「こらこら君、部屋を訪ねる時はノックをするものだろう？」

「……ごめんなさい。あ、これタオルです」

「ん、すまないな」

「じゃあ、失礼します」

「ああ、ありがとう」

僕はとりあえずタオルだけ渡して部屋を出た

……何これ!?

「いやいやいや!おかしいでしょう!」

僕は再び勢い良くドアを開けた

「こらこら、ノックをしないか。私も一応女なんだぞ?」

「うわあ!ごめんなさい!」

再び外

「すみません、入っても良いですか?」

「ちょっと待ってくれ」

…何だこの展開

「…よし良いぞ」

「失礼しまーす」

部屋に入ると胸元にタオルを巻きつけてその人は立っていた

「いや、助かったよ…え」と

「あ、名前ですか？修司です。佐々修司」

「そうか修司君、助かったよ。改めて礼を言おう、ありがとう」

「いえ、そんなことより少し質問しても良いですかね？」

おかしいな、ここは僕の家で僕の部屋の筈だけど、何か他人の部屋にいるみたいだ

「ああ、勿論だ。何でも聞いてくれ」

「え〜ととりあえず、あなたは誰ですか？」

こんなに状況にそぐわない質問をしたのは初めてかもしれない

「私か？私の名はカリス、死神だ」

スルーだ、今は死神はスルーだ

「そうですか、ではカリスさん？さっきの大量の出血はどこに行っちゃったんですか？」

「ああ、安心してくれ。少しシミになってしまったが床の血はきちんと拭き取っておいたから」

頑張れ僕！

「いえ、そうじゃなくて、あれだけの出血だと大変な大怪我でしょう？あれは一体……」

「何だそんなことが。傷は深かったが、治した。まあ少し骨が折れたがな」

ああ、もう無理だ

「……」

「どうした修司君、急に黙り込んで」

「おかしいでしょうーっ！」

僕の理性が限界を超えた

「しゅ、修司君！いきなりどうしたんだ！？もしかして床のシミの事か？いや、私も出来るだけの事はしたんだが、如何せん血のシミは頑固で……」

「違いますよ！床のシミとか割とどうでもいいですよ！あなたは一体何者なんですか！何で僕の所なんですか！一体どうなってるんですか！」

もう僕は暴走しかけていた。理解不能な情報があまりにも多すぎた

「待て待て待て、一度に聞かれても困る。順番に答えていこう」

「え？あーはい、お願いします」

「まず私は死神……」

「いきなりわからないですよ」

「人の話は最後まで聞くものじゃないか」

大変なことになった、死神って…何ソレ

「死神って何なんですか？」

「死を司る者だ」

即答かあ

「死って……わかりました。百歩譲ってあなたが死神なのは認めましょう。問題はその死神が僕になんの用かって事です」

よし、よく言い切った僕！

「なんだ修司君、聞いていなかったのか？仕方の無い奴だな」

なんでこの人の物言いは上からなんだ

「いいか？もう一度言うぞ？…しばらく私をここにかくまって欲しいと言っただ」

「か、かくまうって……なんですか！？傷はもう癒えたんでしょう？」

どうやって直したかについてはとりあえず置いておこう

「ああ、傷は癒えた。だが力を使い切ってしまったから、しばらく休養しないと」

「ああ、なるほどね。…つてすぐ納得出来る程世の中簡単じゃないんですよ！あんたは何なんだよ！ていうか何で僕なんだよ！」  
僕は柄にもなく声を荒げた。だつて限界だつたんだ

「ふむ…これはあまり言いたく無かつたのだが、仕方あるまい」

相変わらずこの人は怯まないな、それに一体何を言うつもりだ？

「君はさつき死神を名乗る男に殺されかけただろっ？そして何者かに救われた。そうだろう」

「な、何でそれを…まさか助けたのが自分だともいうつもりですか？だつたら無理ですよ！僕を助けてくれた人は何かスゴい鎌を持つてたんですからね！あなたは持ってないでしょう？」

ふっ、してやったりだ！こうなれば僕の勝ちは揺るがない！大人しく退場してもらおう

「鎌…ああ、これか？」

カリスさんがそう言い、手を翳すと空間が歪み、あの鎌が現れた

「これでも何か言うことが？」

「…死神すげええ！」

なんて事だ、こうなつたらもう断る訳にはいかない

「………いいか修司君、ああは言ったが私は君を助けた事で貸しを作

つつもりは無い。君が私を心から拒むのなら即刻ここから立ち去る。だから君の本心で決めてくれ、私の運命は君に委ねる事にしよう」

「ぼ、僕に…」

女性はただ頷いた。この人は本気だ

・・・

（よく考える、突然現れてかくまってくれたなんて、失礼だし、非常識だ！）

（でもこの人に命救われたんだよ？そんな人を見捨てるの？）

（本人が貸し借り無しって言ってんだから良いだろ。だいたい怪我が治ったなら大人しく出てればいいんだ）

（それが出来ないから向こうは頭下げてるんでしょ？それにいくら貸し借り無しって言ったって、こっちは命救われてるんだから重さが比例しないよ。それを無視するほうが失礼で非常識なんじゃないの？）

僕の頭の中で会議が行われている、それもかなり激しい論争だ。

（そうは言ってもな、こんなどうやって隠し通すんだよ。母さんにバレたらどうする？）

（相手は死神だよ？姿隠すくらいの事出来るでしょ）

(出来なかつたらどうするんだ)

(さあ、なんとかなるでしょ)

…頭の中の僕は随分適当だなあ。しかも死神って認めてるあたりな  
んか悔しい

そんな脳内会議もどうやら決着がついたようだ

・・・

「修司君？どうした？急に固まって、具合が悪いのか？」

「…いえ、ちょっと会議してまして。大丈夫です、もう平気です。」

「そうか…で、どうなんだ？」

「はい、とりあえずあなたの言う力が戻るまではここで休んでいっ  
て下さい。まあ、何もありませんけど」

僕は散々悩んだ結果、この人をかくまう事にした

「…私に救われたから、仕方無くか？」

「…正直な所それは結構デカいです。あなたが死神だとか色々考え  
ましたけど、どうあれ助けを求めている人の手を払うことは僕には  
出来ませんでした」

「…そうか、君は優しいな」

カリスさんはそう言うと言いつと嬉しそうに微笑むと手を差し出した

「改めて名乗ろう、カリスだ。しばらく世話になる」

「修司です。きっと僕には何も出来ませんが、それでも良ければ」

僕もカリスさんにならない手を出し、握手をした。こうして僕とカリスさんは出会ったんだ

そしてこの日からちょうど一週間後、僕は…人間を辞めた

## 第一話：始まりの夜（後書き）

実はこの作品は三話で終わります。理由は追々伝えませんが、短編にしなかった理由はひとえに面倒だったからです。とりあえず続きはあるので、反応次第で書きたいと思います

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3885d/>

---

死神達の鎮魂歌～僕が人間を辞めた日～

2010年10月20日19時22分発行